四賀地区 図書だより

令和５年２月１日号

発行　四賀公民館図書視聴覚委員会
（事務局　TEL 64-3112）

心のふるさと四賀に伝わる民話

昨年の２月号に続き、今年も平成６年に四賀老連民話グループにより発行された『心のふるさと～むらの今昔物語～』からお話を紹介します。横川の青龍社にまつわる話が２つ収められています。

『青龍様と天狗』

雨が降らなくて困った年、横川村の衆は青龍様に雨を降らせていただこうと、古びた社殿を建て直すことにしました。早速、皆で材料の木を切り出しましたが、池に渡す橋桁用の大木は運びきれません。翌朝ひとり早く現場に着いた喜代吉は、突然現れた見慣れぬ男から、「二人で担いで運ぼう」と言われますが、とても重くて無理そう。それでも促されて先の方を持つとなんと軽々と持ち上がり、あっという間に青龍様まで運んでしまいました。礼を言おうと振り返ると、もう男の姿はありませんでした。遅れて到着した村の衆は「それは大天狗峯の天狗様にちげえねえ」とありがたがって社を仕上げたところ、大天狗峯から黒雲が湧いて待ち望んだ雨が降ってきました。

青龍社は、四賀地区の東側護りの、横川地区の山の中腹にあります。社殿に掲げられた額絵によると社の建て替えは明治 15 年の事でした。当時は本殿と拝殿の間の池を渡る橋があり、これはその橋桁の丸太にまつわるお話です。額絵では、喜代吉ではなく中澤八代吉とされてます。大天狗峯は青龍社の西側の秋葉神社のあたり。現れた男は秋葉様の化身か、秋葉神社の天狗ではないかと人々は考えました。実際は山を行き来していた修験者だったのかもしれません。

現在の青龍社は本殿のみが場所を少し変えて残っており、横川町会氏子によって毎年５月にお祭りが行われています。

『竜が爪』

昔、横川の山裾「池ノ平」に棲んでいた池の主の竜が、池が空になったため番場峠の池に逃れました。竜が駆け上がったその時の爪痕が岩に刻まれていたと言いますが、今は道路拡張で残っていません。

収録されているのは短いお話ですが、地元では、岩に残った爪痕は青龍社の池に棲んでいた竜が逃げ出した時に付けた爪の跡だと伝えられています。竜が逃げ出した理由には別の説も伝わっています。

昔の青龍社の祭りは、安曇や小県の方からも参拝者が来るほど大変賑わっていましたが、だんだん下火になってしまったため、青龍社の下の池ノ平で、競馬をやって賑わしたのだそうです。ところが青龍社の竜は馬が大嫌いだったので、池を逃げ出しました。

青龍社から、竜が爪の岩を経て日向山まで草が倒れていて、それが竜が通った跡とされました。

いずれのお話も、西洋文明が入った後の明治の実際にあった出来事が元になっていると思われます。今よりも神仏を身近に感じていた人々が、出来事や体験を神と結びつけて伝えるという文化が、つい最近まであったことが分かります。

もし現代の私たちが、八代吉と同じような体験をしたらどう考えるのでしょう。缶コーヒーの CM に出てくる宇宙人に会ったとか？

新着図書・おすすめ図書のご案内

新着図書

児童書

『バスが来ましたよ』　由美村 嬉々　文
『あるあるいるいるようかいえほん』　いちよんご　作
『名探偵ポアロ ハロウィーン・パーティ』　アガサ・クリスティー　著
『いのちの木のあるところ』　新藤 悦子　作

一般書

『よくがんばりました』　喜多川 泰　著
『栞と嘘の季節』　米澤 穂信　著
『老害の人』　内館 牧子　著
『十三夜の焔』　月村 了衛　著
『なんとかしなくちゃ。星雲編』　恩田 陸　著
『髙橋源一郎の飛ぶ教室』　髙橋 源一郎　著
『71歳、年金月5万円、あるもので工夫する楽しい節約生活』　紫苑　著

おすすめ本

『ザリガニの鳴くところ』
（本屋大賞翻訳小説部門1位）　ディーリア・オーエンズ　著

主人公カイアは６歳で家族に見捨てられた。「湿原の少女」と蔑まれながら、愛を求めつつも人間社会を離れ、一人孤独の中で湿地の生き物と共に生きていた。物語は過去と現在が行き来し、やがて事件の起きる1969年に重なり…、衝撃の真実は終末で明かされる。良質で正統派のラブストーリーであり、ミステリーでもある。著者は動物学者で植物学者。作品中の湿地の自然描写が緻密で美しい。

『この父ありて　娘たちの歳月』　梯　久美子　著

石牟礼道子、茨木のり子、田辺聖子…。戦中、戦後の激動の時代に『書く』という困難な道を選んだ9人の女性たち。９人の原点には、深い愛情を抱きながらも父を一人の人間として客観的に凝視してしまう、唯一無二の父娘関係がある。全編を通して、真摯で毅然とした彼女たちの生き様に対する著者の深く温かい眼差しが注がれていて、読後感も温かい。

『目の見えない白鳥さんとアートを見にいく』
（本屋大賞ノンフィクション大賞）　川内　有緒　著

白鳥建二さん、51歳、全盲。年に何十回も美術館に通う― 。目の見えない人が美術作品を「見る」ってどういうことなんだろう。白鳥さんと作品を見て会話していると、新しい世界の扉がどんどん開き、今まで見えなかったことが見えてきた。アートの意味、生きること、障害を持つこと、一緒に笑うこと。白鳥さんとアートを旅して、見えてきたことの物語。

編集後記

横川の青龍社に登る林道はここ数年のゲリラ豪雨で轍がえぐれて 4WD の軽トラでも登れなくなってしまいました。春になったら補修のために石を運び上げてお祭りを迎えないといけないなあ … と。